五十七　誄　詞

これの小床を仮の喪屋と斎い定めて暫時置き据え安め奉る故△△△△大人の霊の御前に慎み歎かいて白さく

あわれ現世の人の世は果なく定め難きものとは知りつれど汝大人の昨日に変わる今日の御姿を見奉りては誰かは驚き嘆かざらむ

汝大人は日本海に臨む○○の港に生を亨けられ　春秋に富む弱十六才にして京都なる呉服問屋に就職され　程なくその輸送部の勤務としてここ横浜に出られしが　何時しか年月は流れて五十有余年を経したり　その間に関東大震災を味われ或いは又二人の我が子△△大人△△大人を失われ事は長い一生の最も厳しきふしにしあらむ　されどこれ等のふしにもめげず何時までも若い人の如き熱も勢もて　七転八起の店の経営に身を梃し　只管メリヤスや布地などの商業もて人世の為にいたづき前世よりの深き因縁に引き誘われ家の内に大いなる波風を見て後は只一条にふしから芽を出すことの望みに胸をふくらませ　底つくさんげの道を加えつつ修養科　講習などの学会に身を置き親神の御教えに耳を傾け　教祖九十年のしんどの中にある実を学び遂には△△分教会の二代会長となり後　半生をたすけ一条に男の真実をそそぐべくようやくその途上につかれしが　ゆきりなくも重き御病に見舞われ給い遂には去る九月の初め○○療養所に入院されたり　ここを以て親族家族心を揃えて只管親神に乞い祈み奉りその心の立替成人を期せしがその甲斐もなく医師の業もすべて尽き果てて　この年この月○日齢七十一才を生きの涯りと逝く水の還らぬ如く入る月の影消ゆるが如く惣ちに朝露のごと夕露のごと果なく出直し坐しつるは云わむ術為む術知らに今更に夢に夢見る心持なむあわれ悲しきかもあわれ悔しきかも

今日より後はその明るい御声に接すること叶わず　いそ〳〵とこまめに立ち働かれし御姿を眼の当たりにするすべもなし　さわあれど二人の女子達もそれぞれ学び舎を終え最早自らの力もて人の世に首途する順序もつき大人がこの世の仕事も殆ど完成されたり　今は現世の定めと限りしあれば明日を御葬の日と斎い定めて今宵しもこれの霊舎に斎い奉り鎮め奉り御前に御酒御食種々の味つ物を捧げ奉りて拝み奉らくを甘らに安らに聞食し諾ひ給いて　今より後これの△△分教会に打群れ集う道の子たちを始め○○家につながる親族家族の守護神として鎮まり坐し　汝大人は暫し親神のふところに安らに抱かれ給いやがては身も心も健やかに再びこれが世に出直さん事と深く心に祈り　更には又上級○○分教会誕生のつゆ払いとなり先導となられし大人が生涯のいさおしを真心もて感謝しつつ恐み恐みも白す